

## 小野蘭山自筆稿本『居呂波別動植物名彙』について ：方言資料としての価値

二階堂， 整  
福岡女学院短期大学講師

<https://doi.org/10.15017/11936>

---

出版情報：語文研究. 66/67, pp.98-110, 1989-06-10. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 小野蘭山自筆稿本『伊呂波別動植物名彙』について

——方言資料としての価値——

二階堂 整

## 一、はじめに

武田科学振興財団の杏雨書屋蔵書の中に、『伊呂波別動植物名彙』と題された資料がある。目録によれば、小野蘭山自筆稿本とみなされるもので、全十冊の資料中に、多量の動植物の名称が収録されている。

小野蘭山の著作には、『本草綱目啓蒙』という大著があるが、この『伊呂波別動植物名彙』には、『本草綱目啓蒙』未収録の多量の方言語彙が含まれているのである。さらに、本書の内容を細かく検討することにより、『本草綱目啓蒙』編纂の過程も明らかになってくるのである。

本稿では、今まであまり言及されることのなかったと思われる『伊呂波別動植物名彙』の紹介とその価値について、述べていきたいと思う。

## 二、近世の方言資料・本草書<sup>註</sup>

近世の方言資料として、よく引かれるものに『物類称呼』がある。安永四年（一七七五）、越谷吾山によって編まれた、近世唯一の全国方言集で、約四千語の方言語彙があげられている。

大田栄太郎氏によれば、語彙収録<sup>註</sup>にあたり、多くの本草書からの引用がみられるという。

これは、当時、本草研究が盛んだったことによるもので、多くの本草書の中に方言語彙が収録されていたことを示す。

本草学は、近世になり、急激に発展した学問であるが、そのきっかけは、一七世紀前半、明の李時珍の『本草綱目』を輸入したことにある。

その後、いくつかの本草書が刊行されるが、宝永五年（一七〇九）に、貝原益軒の『大和本草』が出され、日本の本草学の樹立に至る。延享四年（一七四五）には、稻生若水の仕事を引き継いだ丹羽正伯によって、千五十四巻の大著『庶物類纂』が完成する。

文化・芸術の発展の中で、「薬名会」といった博覧会も行われ、多くの本草書が出版され、近世の本草研究は、いよいよ興隆をきわめる。そして、その中で、日本の本草学を集大成した小野蘭山が登場するのである。

### 三、小野蘭山と『本草綱目啓蒙』

小野蘭山は、『本草綱目啓蒙』（以下、『啓蒙』と略す）を著わしたことで有名であるが、この『啓蒙』については、杉本氏の研究に詳しい。<sup>注1)</sup>

杉本氏によれば、「本書は、江戸時代最大の全国方言辞典といわれる『物類称呼』と比較しても抜群に方言が多いし（参考文献中に『物類称呼』はほとんど用いていないようである。）しかも文字どおり北は北海道より南は琉球までと、全国方言を網羅してすばらしい景観である。多少整理不行届のところもあって、同じ〈筑前〉などが、分かれて別々に収載されているが、ともかく驚くほどの語彙である。植物採集と同じく、方言や語彙の採集もどんなに時間と苦勞のかかることか。体験したのみが知る苦闘なのだ。まして、本書が『物類称呼』を〈原拠として補訂を加えたものかと思ふ〉（東條操解説）という見解は、本末転倒といってもいいくらいで、江戸時代の本草学と方言研究の関連を無視した考察とも評することができる。」とのことである。

ところが、『伊呂波別動植物名彙』の内容を検討してみると、どうも、蘭山は、『物類称呼』を引用したと考えざるをえないような記述がみられるのである（後述）。

そこでまず、蘭山の略歴と『啓蒙』についてふれてみたい。小野蘭山（一七二九〜一八一〇）は、享保一四年、京都に生まれる。松岡玄達に師事して、本草学を学び、後、住居を京都河原町に定め、『衆芳軒』と名づけ、弟子を集め、本草学を講義した（この『衆芳軒』の名が、『伊呂波別動植物名彙』を蘭山自筆稿本とする証拠の一つとなるが、後に述べる）。

寛政二年（一七九九）、七十一歳の時、幕府に召され、江戸に出た。彼は、全国から集まった弟子を相手に講義する（同時に弟子から、全国各地の本草の情報を集めたのではないかと想像される）一方、幕府書庫の『庶物類纂』等の文献を参考に本草研究を続け、全国各地を採葉旅行している。

こうした学問の成果が、『啓蒙』という形で大成されたのである。『啓蒙』の初版本は、享和三年（一八〇三）〜文化三年（一八〇六）にかけて刊行、冊数全四八巻、二七冊の大作である。その後、『重修本草綱目啓蒙』、また、井口望之が重訂を加えた『重訂本草綱目啓蒙』が出されているが、本稿では、杉本氏が研究対象とされた初版本について、述べていく。

全体の内容は、水（巻一）・火（巻二）・土（巻三）・金石（巻四〜七）・草（巻八〜一七）・穀（巻一八〜二二）・菜（巻二二〜二四）・果（巻二五〜二九）・木（巻三〇〜三三）・服器（巻三四）・虫（巻三五〜三八）・鱗（巻三九〜四〇）・介（巻四一〜四二）・禽（巻四三〜四五）・獸（巻四六〜四七）・人（巻四八）と

なっており、博物学的色合いが強いとされる。

記述の方法については、次のように整理される（杉本氏による）。見出し語

(1)和名…(いうまでもなく、方言をふくむ) / (2)〈一名〉…(出典として中国書をあげる) / (3)本文…蘭山の説明の部分。 / (4)〈釈名〉 / (5)〈集解〉 / (6)主治 / (7)〈附方〉 / (8)〈附録〉…追加すべきものをあげる。

このうち、国語学上、貴重なものは、方言語彙であるが、幸い、杉本氏により、総語彙索引が整理されている。この索引で、語彙の後ろに地名が表示されているものの数は、約五千語。総語彙数が、一万二千語あまりなので、およそ、半分近くが方言語彙ということになる(アセブ(播州・豊前)等の複数地名表記の語も一語と数えた)。

収録された方言の地域名も、全国にわたり、(肥後・肥州・東国・江都・仙台・江戸・京・勢州松阪・播州酒見北条・琉球・北国)など、広狭さまざまで、多いものは、一つの名称に五〇以上の方言(巻四〇 魚部/杜父魚の項)を列挙している。

引用してある書も、中国書はもちろんのこと、和名・方言においては、和名鈔・大和本草・万葉集・詞花集等、様々である。

ここで、『啓蒙』の方言記述の例を示す。

玉蜀黍(穀部/卷一九)

ナンバン ナンバンキビ ナンバンキビ 播州 クハシンキビ 同上  
トウモロコシ 東国 サツマキビ 備州 タカキビ 因州 コウライキビ 讃州  
トウキビ 筑前 ナンバントウノキビ 遠州 クハシンキビ 越後 トウキ  
ミ 奥州 キミ 南部 ハチボク 勢州 マメキビ 越後 タマキビ

近世の資料にこれだけ多くの方言語彙が、収録されていることは、国語学上、きわめて、重要なことである。だが、なぜ、本草書にこれだけ多くの方言語彙が載せられたのであろうか。

島田氏によれば、<sup>(注)</sup>「中国書に方言についての記述を行なうものが種々あること」や、中国で方言について「問題意識を掘り起こす発言・記述を行なう者が次第に多くなったこと」が日本に影響を与えたとされる。

続けて「薬学としての本草は人命に関する学問なので、言語の相違により生ずる誤解・難解に対しては早くより注意し、できるだけ多く方言を書き添えようとの風があった。また、はもは南方、にしんは北方というふうな産物に南北があり、漢名に対する邦品を検討するさい、某地方の産、方言某々たるべしと自然方言が登場することも多い。地誌・物産書・地方産動植物の研究書の採集記の類には方言を添えるものが自然に多くなる。しかし、方言を採集するのには一番有利なのは、中央にいて、地方よりの遊学者を多く擁する碩学で、小野蘭山がその最たる人である。その著述・口述筆記には一般に方言が多いが、ことに本草綱目啓蒙には方言の記述がきわめて多い。蘭山における方言研究は好箇の研究主題である。」とされる。

おそらく、蘭山は、地方出身の弟子からの情報、先学の本草書(庶物類纂は全巻、筆写している)の利用、自らの採集旅行による収集を通じて、多くの方言語彙を集めていったと思われる。

そこで、その足跡をうかがうことのできる『伊呂波別動植物名彙』について、述べていきたい。

#### 四、『伊呂波別動植物名彙』

武田科学振興財団の杏雨書屋蔵書目録(臨川書店 昭57)には、次のように記されている。

「伊呂波別動植物名彙」六卷 又別本一卷 又別本一卷 又魚類一卷 又獸類一卷 江戸 小野職博(蘭山)著 自筆稿本「衆芳軒藏書記」印アリ 二帙一〇冊 貴重図書⑧

貴重書であるため、実物を見ることはできないが、手元に全10冊の複写があるので、それによって、内容を述べていく。

仮に一〇冊を巻一〜巻十とするならば、巻一の題簽は、左右二つあり、右側は、「龍動植物名彙」、左側は、「龍動植物名彙」と記されており、一丁表に「衆芳軒藏書記」の印がある。巻二は、左側にのみ、題簽があり、「龍動植物名彙」と記され、一丁表に、巻一と同じ印がある。巻六までは、巻二と同じ体裁で、題簽の数字のみが変わる。巻一〜六まで、柱下方に「衆芳軒藏」と記された用紙が、各巻ごとに数枚ある。巻七の題簽は、左に「龍動植物名彙」とあり、印は見あたらない。巻八の題簽は、左に、「龍動植物名彙」とあり、巻末に「衆芳軒藏書記」の印がある。巻九は、題簽が左に、「龍動植物名彙」とあり、印はない。巻十の題簽は左に、「龍動植物名彙」とあり、これも印なし。巻七〜十までは、すべて柱下方に、「衆芳軒藏」と記されている。

一丁あたり、約四〇の語彙が記されており(表1参照)、巻ごとの構成は、以下の通り。

巻一〜八までは、『啓蒙』の分類で、草・菜・穀・果・木部にあたるものが、収められている。語は、イロハ順に、大ざっぱに並び、巻一、四〇丁、イ〜ト・巻二、四七丁、チ〜レ・巻三、一七丁、ソ〜ク・巻四、三三丁、ヤ〜テ・巻五、三四丁、ア〜ミ・巻六、三三丁、シ〜スとなる。巻一〜六までには、主として、草部が多い。巻七は、二六丁、イ〜シで、主として、木部を収載。巻八、六五丁、

イ〜スで、巻一〜七までの補遺にあたるらしく、草・木部までの様々な語がある。巻九、四五丁、イ〜ス、魚、介部収録。巻十、一九丁、ト〜スまで、虫・鱗・禽・獸部の語彙を記載する。

この「伊呂波別動植物名彙」(以下、「伊呂波」と略す)が、はたして、蘭山の手になるものかについては、「衆芳軒藏書記」の印があること、また、用紙の柱下方に、「衆芳軒藏」と記されていること(「衆芳軒」は、蘭山が京で講義を行った住居の名前である)、後述するが、その記載内容が、『啓蒙』とよく一致することからみて、蘭山自筆稿本とみなしてよいと思われる。

ただし、題簽は、後人の手によるものと思われる。巻七は、木部がほとんどであるのに単に完と記されるのみであり、巻十は、虫・鱗・禽・獸部より成るが、獸類とだけある。つまり、内容と題簽の記述が、よく一致しておらず、題簽は後人の手によると考えるわけである。

全体がイロハ順に並ぶといっても、頭文字についてのみであり、それも、巻一では、ロの後に一部、イがまぎれこんでいたり、巻十では、ト・ヲ・ア・カ・ウ・ヤ・コ・キ・シ・ア・ヒとなっており、正確な順ではない。

ただし、各巻ごとに、イロハ別に、柱が黒く塗り分けられており、イからロへ移る際、空欄があり、ロは次の丁の最初の部分から始まっている。これは、各巻、イロハ別に同様な形式となっており、おそらく、各頭文字ごとに部門をたて、どんどん語彙を書き加えていったものと思われる。また、植物関係のイの部でも、前半に草部、後半に菜・穀部が多く集められており、その草部の中でも、同じ地名のものが並べられる箇所もあることから、蘭山が、手控えとして、

記入していった可能性があるように思う。欄外に書きこみがあつたり、同じ語が何度か登場する点からも、蘭山が、本草研究のため、機会あるごとに、語彙を記入していった備忘録の色彩が強いようである。

記載内容については、一つの欄につき、左の形式で載せられている。

イナグサ蕁麻 (巻一 三三丁オ)

見出し語は、ほとんどが、方言語彙で、その下に、それが分類上、所属する植物名(『啓蒙』の見出し語)と、方言の使用地域が示されている。地域名の代わりに、引用された出典名(和名鈔・延喜式・日本紀・大和本草等)が示されている場合もある。加えて、その事物に対しての解説が記されている場合もある。

収録地域は、「石菟 球」、「ハッパンクト 西エゾ」と、全国に渡り、示す範囲も、「イチブ 阿州」から、「犬ケイトウ 豫ノ吉田」まで、『啓蒙』同様、広狭さまざまである。「隠居ノメダマ 金沢尻 語」といった記載もみえる。

巻一〜十までの全収録語彙数、一万三千語あまり。このうち、地名表示のある方言語彙は、約九千語。実に七割近くが、方言語彙なのである。

『啓蒙』の全収録語彙は、約一万二千語。このうち、約半分の五千語あまりが、方言語彙であった。しかし、『啓蒙』には、『伊呂波』にない、水・火・金石・土・服器・人部を含んでいる。これらを除外すると、『啓蒙』の収録語彙、約九千語。このうちの約半分、四千六百語あまりが方言語彙である。対するに、『伊呂波』は、全収録語彙、一万三千語あまり。そのうち、方言語彙は、七割の、約九千語

ほどにもなり、『伊呂波』の語彙の膨大さ、特に、方言語彙の豊富さが理解されることと思う。

さらに、『伊呂波』が貴重な資料であることは、その地名表示の細かさにある。

例として、巻一の三丁表の部分をあげる。〈表一〉は、『伊呂波』巻一の三丁表の部分と、それに対応する『啓蒙』の該当箇所をあわせて並べたものである。

例えば、『伊呂波』上段最初の語、「イナグサ 蕁麻 有馬」は、『啓蒙』では、「蕁麻 ユナグサ 攝州」となっており、上段七番目、「イトロヘイ 牛膝」は、『啓蒙』では、「牛膝」はあるものの、「イトロヘイ」は収録されていないことを意味する。

〈表一〉より、『伊呂波』と『啓蒙』の記載がよく対応していることがわかる。むしろ、地名表示においては、『伊呂波』の方が、詳細である。「攝津」に対して「有馬」、「讃州」に対し「高松」、「豊前」に対し「中津」となっている。『伊呂波』と『啓蒙』は無関係でなく、『伊呂波』を下敷に『啓蒙』が著された感じを受ける。

そこで、巻一の最初から五丁分、一八五語を、『啓蒙』とつきあわせてみた。

対応の形から、次の六つに分類した。

(A) 『伊呂波』、『啓蒙』ともに名称、地名表示があるが、『伊呂波』の方が、より詳しい地名表示のもの。

(B) 『伊呂波』、『啓蒙』ともに名称はあるが、地名は『伊呂波』のみあるもの。

(C) 『伊呂波』にのみ、名称と地名があり、『啓蒙』には対応する記載がないもの。

<表 1>

(本草綱目啓蒙)	(伊呂波別動植物名彙)	第一卷 三丁表	(本草綱目啓蒙)
蕁麻 ユナグサ 攝州	イナグサ 蕁麻 有馬	イラグサ 蕁麻 北山	蕁草 イラグサ
苧麻 阿州ニテ イチブト云	イチブ 苧麻 阿州	イトロベ 蒼耳 牛膝 播作 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	鬼針草 播州 イトロベトモ云
天名精 イノシリクサ 古名	イノシリクサ 天名精	イノヅリ 天名精 イノシリ 勢州 飛 <input type="checkbox"/>	天名精 イノヅリ 勢州
天名精 イヌノシリ 古名	イヌノシリ 同類	犬ノシリクサ 同	天名精
猪蒺 イシモチ 勢州	イシモチ 猪蒺 勢州	イヨヨシ 蒺	蒺
牛膝 イノコツチ 延喜式	イノコツチ 牛膝 延	イノクツチ 牛膝 和名	牛膝 イノクツチ 和名鈔
牛膝	イトロヘイ 牛膝	イノホウヅキ 龍葵 高松	龍葵 イノホウヅキ 讃州
龍葵 イヌホウヅキ 龍珠	イヌホウヅキ 龍葵 龍珠 倭惑	イヌゴシャウ 同 中津	龍葵 イヌゴセウ 豊前
龍葵 イヌホウヅキ 苦職花	イヌホウヅキ 苦職 姫路	イヌノナンパン 白英 北国	白英 イヌノナンパン 北国
葶藶 イヌナツナ	イヌナツナ 葶藶	イノコ草 狗尾草	狗尾草 イノコグサ 長崎

(D) 『伊呂波』に名称のみあり、『啓蒙』には対応するものが全くないもの。

(E) 『伊呂波』と『啓蒙』がきれいに対応するもの。(例えば、『伊呂波』に名称のみあれば、『啓蒙』も名称のみであり、『伊呂波』に名称と地名があれば、『啓蒙』にも、同じ名称と地名があるものを指す)

(F) 『伊呂波』、『啓蒙』ともに名称はあるが、地名や出典は、『啓蒙』にのみあるもの。

整理すると、(表2)のようになる。○はその表示があること、◎は、より詳しい表示を意味する。下段の数字は、一八五語を分類した数である。

対象としたものは、『伊呂波』の見出し語であり、『伊呂波』に「イワゼリ前胡」、『啓蒙』には、「前胡」しか記載のない場合は、『伊呂波』の見出し語、「イワウゼリ」に対応する『啓蒙』の記載がないとして、この場合は、(C)に分類した。

(A) 31語 ( ) は『啓蒙』の地名

- 犬ノ尾 黒川(防州)・イヌヨモギ 南部(和州)・犬ケイトウ
- 豫ノ吉田(豫州)・イワダラ 小千谷(越後)・イナグサ 有馬(攝州)・イノホウヅキ 高松(讃州)・イヌゴシヤウ 中津(豊前)・イヌコロく 佐賀(肥前)・イヌサド 佐伯(豊後)・イナゴサシ 東城(備後)・イトカヅラ 江州 大本 ミノ上野呼(江州)・イトロベ 三ヶ月(播州)・イタチノ足 津(勢州)・イギンドウ 萩(長州)・イボトリクサ 越 福井(越前)・イヌガンピ 三ヶ月(播州)・イワナ 勢 岸和田(勢州)・イトラン 薩 久居

F	E	D	C	B	A	伊呂波		啓蒙	
						名称	地名	名称	地名
○	○	○	○	○	○				
/	○	/	○	○	◎				
○	○	/	/	○	○				
○	○	/	/	/	○				
11	74	26	33	9	31				

<表 2>

- 花戸? (薩) ・イヌカゴ 大田原村(播州) ・イヌゴボウ 羽根浦(土州) ・イシバサミ 桑名(勢州) ・イヌシンザイ 東城(備後) ・イボラン 羽根浦(土州) ・岩マツ 豫 讚 勢呼 野州上吉田(勢州) ・岩カヅラ 上野イカホ(上野) ・イテウ草 因(伯州) ・イミリグサ 佐伯(豊前・豊後) ・イラ、筑前 長ノ宇部(筑前) ・イモジ 和名 京呼(和名鈔) ・イシモチ 大田原村(播州) ・イヌヘドグサ 東城(備後)

(B) 9語

- イヌホウヅキ 姫路・イラグサ 北山・イタビ 大本(大和本草か?) ・犬ノチンボ 江ノ追分・岩石斛 有馬・岩スタレ 久留米



豊前・イヌウド 高尾・イカリサウ 高知・岩マメ 丸亀 大田原村

(C) 33語

インガキ 仙台 越後・イワウニンジン 佐州・イワナデシコ 三ヶ月・イワウゼリ 佐州・イソセン 高知 羽根浦・犬アザミ 但州 吉井村・イトロヘイ 備前・イヌホウツキ 倭?・イヌフジ 三ヶ月・イツノソ 尾鷲・イトソメ 西大寺・インガキ 伯ノ米子・イヌノマメ 筑前・イギ 下松・岩ザクラ 甲州・イハイグサ 桑名・イモハクリ 薩・岩セウブ 菰□・岩スゲ 三ヶ月・イチリン草 讚・イバラタウガラシ 江・イツトロベ 赤穂・イヌノコイワラ 筑後・岩ハギ 橘村・イヌノチンボ 江・岩石斛 姫路・イトハギ 金沢・岩芭蕉 高知・インザワラ 九州・インザワラ 九州・イビラ 臼杵? 豊前・イハタカナ 薩・イコマ 八丈

(D) 26語

岩ギク・インガンピ・因仁草・イヌヒリクサ・犬ノシリクサ・イヨヨシ・イタチグサ・イワシボネ・イゲ花・一郎兵衛コロシ・イヌチヨロギ・岩ラン・一本草・伊吹コ、イヌサイギ・岩シバ・岩ラシ・イハシヤウガ・イハチサ・一夏草・イハタバコ・イトゴケ・イヌアカザ・イヌチサ・イシモチ草・一本草

(E) 74語

インゲンサ、ゲ 佐州・イノミ 佐州・イトアラサ 佐州・イモゴ 佐州・イワントイラ 佐州・イタチノヒトモトクサ 佐州・イチ

ブ 阿州・イシモチ 勢州・イトロベ 播州・イノジリ 勢州・イヌノナンバン 北国・イノジアハ 水戸・医者ダオシ 肥後・イカシキ 泉州・イヌツヅラ 熊野・イシクサリ 越後・イタノクサ 加州・イバラボタン 播州・イヌツノジ 仙台・一夜ニヨロリ 今治・イツトキバナ 周防・岩ダラ 越後・イヌスイバ 伯州・イテウシノブ 阿州・イシシダ 駿・イワマキ 丹・一里グサ 津 軽・イドバス 和泉・イモカゴ 三州・イセンド 能州・イノコツチ 延喜式・イノクツチ 和名鈔・イタチグサ 延喜式・イタミ 日本紀・イフス 和名鈔・イホスキ 延喜式・イヲツキ 延喜式・イヌエ 和名鈔・イヌアラ、ギ 延喜式・猪古 万葉抄・イキクサ 和名鈔・イモガラ 和名鈔・イシミカハ・イシミガハ・イハヤギク・イノシリクサ・イヌナヅナ・隠元ナ・イヌタデ・イヌタデ・イヌイタドリ・イヌタブ・イラグサ・イラノ、イビツイバラ・イボクサ・イチハツ・イヌカウジュ・イヨカズラ・イヌウド・イカリノウ・イハマメ・イハドグサ・イチヤグサ・イツマテクサ・イノモトグサ・イロヘロ・イトスゲ・イシイモ・イモ・イヌビユ・イテウガタ・イツモナ

(F) 11語 ( ) は『啓蒙』の表示

イナテクサ(古歌ノ名)・イヌノシリ(古名)・イツマデグサ(古名)・イチシノ花(古歌)・イハクスリ(和名鈔)・イチシ(古歌)・イツモノハナ(古歌)・イハカシハ(古名)・イエツイモ(和名鈔)・イノコ草(長崎)・イシモチ草(播州)

右の資料より、『伊呂波』と『啓蒙』の関係の深さが、読みとれる

ように思う。両者の記載が、全く一致するものは、(E)の74語。この中には、水戸、今治といった狭い地域名の語も含まれている。さらに、『伊呂波』の方が詳しい地名表示の、(A)31語を加えると、105語。全105語の半分以上となり、単なる偶然の一致とは思えない。

蘭山は、『啓蒙』著述にあたり、日頃、手控えとして記録していた『伊呂波』を利用したのではないだろうか。このことは、逆に、『伊呂波』が、蘭山自筆稿本であることの内部証拠と言えるように思う。

さらに、『啓蒙』に名称しかないもの、または、記載のないものは、(B)・(D)の68語もあり、 $\frac{1}{3}$ 以上になる。このうち、(B)、(C)の42語は、『啓蒙』にも収録されていない方言語彙であり、蘭山が、単に収録から漏らしたものでなければ、貴重な方言資料といえよう。

逆に、『啓蒙』の方が、地名・出典等で詳しいものは、(F)の11語にすぎず、それも、ほとんどが、「古名」、「古歌」の類である。

前述したように、『伊呂波』は、イロハの語の項目ごとに欄を分けてある。各頭文字の項は、必ず、丁の最初から始められている。おそらく、イロハ各文字ごとに欄を分けておき、書物や、弟子や、採葉旅行から、語彙が得られるたびごとに、ちょうど我々がカードを取るように、抜き書きしていったのであろう。

同じ地名(濃 武儀郡・濃 加茂郡・濃 厚尺郡・濃 恵那郡等と並ぶ)が続けて並べられる点や、(A)の語群にみられる、黒川(防州)・豫ノ吉田(豫州)・大田原村(播州)といった詳細な地名表示がある点からもそれが、うかがわれる。

また、巻九 魚類の四二丁表には、次のような記載もある。  
百万歳 万歳キヨ 万歳ダイ 紀 寛政三亥年捕

百万鯛 天明三卯十二月廿四日 土州西濱

さらに、巻十の獸類、九丁表には、

ウミヲソ 明和七年寅六月十七日□□ 雲州神門郡杵築捕

ウミヲソ 宝曆九卯正月十七日上 加州大野捕

同 延享戊辰三月捕 越後

このように、日付と場所を記したり、「捕」の表現箇所から、蘭山自身が、採葉旅行等の際、実際に観察したり、収集した事物の方言語彙を収載していたことが、想像される。

『伊呂波』の全語彙、約一万三千語は、『啓蒙』の全語彙、約一万二千語より、勝ってはいるものの、『啓蒙』の語をすべて収めているわけではない。魚類、獸類は、『啓蒙』の方が、充実している部分もある(例えば、『伊呂波』の魚類には、地名表示があまり多くない)。

しかし、『啓蒙』編纂にあたり、『伊呂波』が参考にされたであろうことは、両者の関係の深さからみて、明らかであろう。そして、『伊呂波』には、『啓蒙』よりも詳しい地名表記がなされていたり、『啓蒙』未収録の多数の方言語彙を含むことは、近世の方言資料として、貴重なものであると判断してよいものと思われる。

以上は、主として、方言語彙と地名表示に関して、考察してきたものであるが、『伊呂波』には、その他、出典を明記した語彙も、かなり、存在する。『啓蒙』同様、「延喜式・和名抄・大和本草」等は、数多くみられる。が、この他に、「女重宝記・安南国漂流記・北越志・木曾志・伊豆海島風土記・無人島漂流記」等の名が記されている。これらは、『啓蒙』の中の引用表示の中にない書である。こうした出典名に注目することにより、蘭山が『啓蒙』著述にあたり、どのような書を参考にし、引用したかが、確認できると思われる。

引用に関しては、第三章の初めでもふれたように、蘭山は、『物類称呼』を引いたのかという問題がある。次章では、それを取り上げる。

## 五、『本草綱目啓蒙』と『物類称呼』

『啓蒙』には、『物類称呼』（以下、『物類』と略す）引用をしめす表示はない。そのため、『物類』を引用したかどうか、問題となっている。

東條操氏（注6）は「後に小野蘭山の本草綱目啓蒙の如き、全国の方言を掲記したものがあがるが（その方言も物類称呼を踏襲したものが過半である）」とされたり、「本草綱目啓蒙には方言の記載極めて多く、よく学者に引用されるものであるが、これも物類称呼と一致する例が多く、恐らくは本書（物類称呼のこと 筆者注）を原拠として補訂を加えたものかと思う。例えば、魚狗（中略）を本書巻一の魚狗の条と対照すると決して単なる偶合と思えない。杜父魚、石蒜等を見ても、増補と思われる方言もかなり多いが、本書との一致も決して少なくない」とし、『啓蒙』は『物類』をかなり引用しているとみえておられるようである。

引用文中の魚狗の後の中略は、『啓蒙』の魚狗の項の引用であるが、次にこの魚狗について、『物類』と『啓蒙』を比較してみたい。

### 『物類称呼』（注6）

魚狗 かはせみ一名少微○中國にて。すどり、京都及東武にて。かはせみ、武州及下野にて。そな、奥州仙臺にて。すなむぐり、出

羽國にて。るり、下總にて。じよな、甲斐にて。そびな、駿河國沼津邊にて。あびとり、加州にて。むぐり、美作及備前にて。しよに、伊勢及出雲肥州四國にて。しやうび（或はしやうびん共いふ）薩摩國にて。ひすいと稱す。「かはせみ」といへるは深山そびと云物あるに對しての名なり。薩州に深山ひすいとよぶ。東國にて深山しやうびん共、或は所によりては水乞鳥と云。又清盛など、異名す。其故は此鳥飢餓して水を好によりて名付と云。西にて雨乞鳥と稱するも此鳥なるへし（舊事記・古事紀・日本紀）ともに翠鳥と有

### 『本草綱目啓蒙』

魚狗 \*古事紀旧事紀 カホヨドリ藻塩 \*少微 扶翼抄 シヤウ  
ピン播州 セビ本草 セミ同上 カハセミ京 \*シヨニ 作州備前 シヨニ  
ン伯州 シヤウニン播州 ソナ仙台 \*スナムグリ カハキジ共ニ  
\*雲州 ジヨナ下総 \*ソビナ 甲州 ルリ羽州 \*スドリ 中国 \*エビトリ 沼津  
\*ヒスイ 薩州 ムグリ加州 カハシヤウビン濃州

共通するものに、\*を付したが、よく一致するものが多いようである。

この問題については、徳川氏も言及しておられる。（注7）『物類』と『啓蒙』の「蟾蜍」と「玉蜀黍」を比較し、両者ともに、共通方言名が多いことを示した上で、「両書の時代関係からは、『本草綱目啓蒙』が『物類称呼』を参照したことを想像させる。しかし、そうしたこともあったであろうが、『本草綱目啓蒙』が参考にした先駆的本草書を『物類称呼』が参考にした可能性もあるわけで、さらに検討すべ

き点がありそうである」との慎重な態度を示されている。  
引用された例のうち、「玉蜀黍」の例をあげる。

『物類称呼』

玉蜀黍 なんばんきび○畿内にて。なんばんきび又菓子きびと云。伊勢にて。はらぼく。西国及常陸、或は越前にて\*たうきびと云。東国にて。たうもろこし。遠州にて。なんばんたうのきびと云。奥州より越後辺にて\*まめきびとも又\*はしきびともいふ。奥の南部にて\*きみといふ(此所にては常の黍をはもろこしといふ)備前にて。さつまきび。因幡にて。たかきびといふ。

『本草綱目啓蒙』

玉蜀黍 ナンバン \* ナンバンキビ ナンバキビ 播州 \*  
 同上 \* トウモロコシ 東国 \* サツマキビ 備前 \* タカキビ 因州 \*  
 イキビ 讃州 \* トウキビ 加州 \* ナンバン トウノキビ 遠州 \* クハシキビ  
 越後 \* トウキミ 奥州 \* キミ 關東 \* ハチボク 勢州 \* マメキビ 越後 \* タマキ  
 ビ

この場合も、\*のつく共通名が多そうである。『啓蒙』は、『物類』を引用したものであろうか。

杉本氏は、これに反対に立場をとる。「本書(啓蒙)のこと 筆者注」は、江戸時代最大の全国方言辞典といわれる「物類称呼」と

比較しても抜群に方言が多いし(参考文献中に「物類称呼」はほとんど用いていないようである。)しかも文字どおり北は北海道より南は琉球までと、全国方言を網羅してすばらしい景観である。(中

略)植物採集と同じく、方言や言葉の採集もどんなに時間と苦労のかかることか。体験したものが知る苦闘なのだ。まして、本書が「物類称呼」を(原拠として補訂を加えたものかと思ふ)(東條操解説)という見解は、本末転倒といってもいいくらいで、江戸時代の本草学と方言研究の関連を無視した考察とも評することができるとしておられる。

杉本氏は、特に、その具体的な根拠を示されておられない。また、先の「魚狗」や「玉蜀黍」の例を見る限りでは、『啓蒙』は、『物類』を引用したかのような印象も受ける。しかし、徳川氏も言われるごとく、両書が、同じ本草書を引用したことによる一致の可能性もある。

ところが、『伊呂波』の出典名注記に着目することにより、この問題に決着をつけることができるのである。

『伊呂波』の出典名に注意してみると、イモシカゴ といいたように、地名の下に「呼」の表示のあるものが出てくる。巻一(六まで)には、あちこちに見られ、「呼」とつくものが、続けて並ぶこともある。どうも、この「呼」は、『物類称呼』の「呼」を示しているらしい。

そのことを明らかにするため、巻一のイの項で、「呼」が付されている一八例について、『啓蒙』、『物類』との対応を示す。表記は『伊呂波』、『物類』、『啓蒙』の順である。

(1)、三者がきれいに対応するもの 六例

・イモシカゴ 常呼(七オ) 常陸にて。いもしか子といふ(物類巻

三二) イモシカゴ常州(啓蒙巻三)

・イヌヒヤウ 相呼(七オ) 相模にて。いぬひやうと云(物類卷三) イヌヒヤウ 相州(啓蒙卷三)

・イウレイバナ 上総 美作呼(七オ) 上総或は美作にて。いうれいばな及びがんばん(物類卷三) ユウレイバナ 上総 (啓蒙卷九)

・イリコ 近江呼(七オ) 近江にて。いりこ(物類卷四) イリコ

江州(啓蒙卷二)

・イシく<sup>ダンゴ</sup>女詞呼(七ウ)

・イシく<sup>ダンゴ</sup>尾呼(七ウ) 団子 だんご。伊勢にて。をまりといふ。女詞に「いししい」と云(尾州にてはひらめに丸きを「いししい」といふ)(物類卷四) ダンゴ ヲマリ勢州 イシイシ女言(啓蒙卷二)

(2)『伊呂波』と『物類』だけが対応するもの一二例

・イトカズラ ミノ上野呼(二ウ) 近江及美濃、或は上野にて。たゞきぐさ<sup>又</sup>いとかがらと云(物類卷三)

・イヌウド 惑呼?(三ウ) 京嵐山にも有。ししうど<sup>又</sup>いぬうど(物類卷三)

・岩マツ 勢呼(四ウ) 伊勢にて。いはまつと云(物類卷三)

・イモジ 京呼(五オ) 芋ノ茎 京にて。いもじといふ(物類卷三)

・インゲンマメ 京呼(五ウ) 京にて。あんげんまめといふ(物類卷三)

・イヌエビ 京呼(六オ) 京にて。いぬゑび(物類卷三)

・イケノオモダカ 白子呼(七オ) 伊勢にて。どんがめぐさ、同国

白子にて。いけのおもだか(物類卷三)

・イモナギ 加呼(七オ) 加賀にて。いもなき(物類卷三)

・イバナシ 京 江州呼(七オ) 京及近江にて。いはなしといふ(物類卷三)

・イサミ<sup>酒</sup>出羽呼(七オ) 酒 sake。出羽にて。いさみと云(物類卷四)

・イリゴメ<sup>ヤキゴメ</sup>越州呼(七オ)

・イリゴメ<sup>ヤキゴメ</sup>春

は。いりごめ(物類卷四)

『伊呂波』で「呼」のつく項目は、必ず、『物類』と対応している。さらに、一八例中、六例は、『啓蒙』ともきれいに一致している。卷一の七丁表には、「呼」のつく語が、十語も続けて並ぶのであるが、これも、蘭山が、『物類』の中から、まとめて、抜き書きしたためである。また、「呼」の表示は、卷六までには、けっこう出現している。

以上からみて、蘭山が、『物類』を見ていることは間違いないこととであり、『啓蒙』との一致例からも、『物類』を『啓蒙』中に引用したとみてよいと思われる。

蘭山が、もっぱら、『物類』から多くを引用したとまでは言えないものの、よく参考にし、『啓蒙』中に、引用したことは、『伊呂波』の「呼」の表示によって明らかにされたと思う。

## 六、終わりに

小野蘭山自筆稿本と考えられる『伊呂波別動植物名彙』は、数多くの方言語彙を収録している。同じ蘭山の『本草綱目啓蒙』にも、多量の方言語彙が載っているが、『伊呂波別動植物名彙』には、より詳しい地名表記が施されていたり、『本草綱目啓蒙』未収録の、多量の方言語彙を含んでいる点において、近世方言資料として、貴重なものであり、もっと注目されてよいものと考ええる。

さらに、その書の内容を検討することにより、本書は、蘭山の本草研究にあたっての手控え帳であったことが想像される。書物からの引用、弟子からの情報、採葉旅行の収集で得られた語彙を絶えず、書きとめるものであったのであろう。

また、『本草綱目啓蒙』と対応する記載が多いことから、『伊呂波別動植物名彙』を検討することにより、『本草綱目啓蒙』編纂の事情(どんな書を引用したか等)をうかがうことができるのである。

今後は、この『伊呂波別動植物名彙』の整理、検討に努め、索引作りをめざしたいと考えている。

〔付記〕

論文執筆にあたり、『伊呂波別動植物名彙』の閲覧、並びに複写を御許可下さいました武田科学振興財団に感謝いたします。

あわせて、資料について、御教示いただきました迫野徳徳先生にも感謝いたします。

〔注〕

- (1) a 杉本つとむ『本草綱目啓蒙 本文 研究 索引』(巨大出版会 昭47)  
 b ———『方言はどう探究されたか』(杉本つとむ日本語講座 三 桜楓

社 昭56)

c 大田栄太郎『郷語書誌稿』(国書刊行会 昭58)

d ———「物類称呼」(『国語学大辞典』東京堂出版 昭55)

e 島田勇雄「一、学術用語」(講座 国語史 三 語彙史)大修館書店 昭46)

f ———「本草綱目啓蒙」(『国語学研究事典』明治書院 昭52)

g 加藤正信「物類称呼」(『国語学研究事典』明治書院 昭52)

h 木村陽二郎「江戸期のナチュラリスト」(朝日新聞 昭63)

i 上野益三『日本博物学史』(補訂版) (平凡社 昭61)

(2) 注(i) c, d

(3) 注(i) a, b

(4) 注(i) e

(5) 東條操『方言と方言字』(増補版 春陽堂 昭19)

————『方言字の話』(明治書院 昭32)

(6) 吉沢義則『校本物類称呼 諸国方言索引』(立命館出版 昭8)

(7) 徳川宗賢『日本語の世界 八 言葉・西と東』(中央公論社 昭56)

(8) 注(i) a, b